

# 明治末期東京語における 係助詞「は」の融合現象と訛意識

——夏目漱石『三四郎』を中心に——

上 坂 彩 奈

## 1. はじめに

明治の東京を舞台とする小説、夏目漱石『三四郎』には、次に見るような係助詞「は」に関する融合現象が多く現れる（使用テキストは近代作家用語研究会(1984)。文番号も同書による。以下同様）。

# 1 十七世紀は古過ぎる。雑誌の材料にゃなりませんね（話手=与次郎。文番号2536）

# 2 そりゃ本当かい（話手=広田先生。文番号4495）

# 3 御兄いさんに黙って、あなたから借りちゃ、好くないからです（話手=三四郎。文番号4998）

# 1は格助詞「に」と係助詞「は」の融合、# 2は指示代名詞「それ」と係助詞「は」の融合、# 3は接続助詞「て」と係助詞「は」の融合の例である。この融合現象は、いわゆる江戸訛の特徴の一つとされている。江戸訛には、イタイ（痛）がイテーのようになる連母音アイの融合や、ヒト（人）をシトと発音するヒトシの混同など他にも様々あるが、係助詞「は」に関する融合は、一部、現代共通語にも残存している点で特異な存在と言える。例えば、上記# 3に見える融合形チャがそうで、「準備をしなくてはいけない」を「準備をしなくちゃいけない」と言うのは、現代共通語においても日常的に耳にするとこるである。

## 2. 調査の対象と方法

係助詞「は」の融合現象に関する先行研究は、その対象とする時代が近世に集中し、近代以降に焦点を当てたものは少ない<sup>(1)</sup>ことに鑑み、本稿では、現代共通語の直接の母胎と言える明治東京語における係助詞「は」の融合現象の実態を発話者の性格や融合が起こる場面・文脈などから細かく分析し、さらに、その融合のパターンによる消長の相違がなぜ起こったのかについて、主として訛意識という観点から考えていこうとするものである（以下、ニワ・テワなど融合していないものを「非融合形」、ニャ・チャなど融合しているものを「融合形」と称するが、例えば非融合形ニワと融合形ニャを併せた全体を示したい

場合は、「には」のように現代仮名遣いによるひらがなを「」で囲んで表示することにする。

具体的な分析材料は、夏目漱石『三四郎』（明治41年発表）を取り上げ、ここから係助詞「は」に関する融合形・非融合形の用例を収集する。漱石は明治東京語話者であり、口語体で書かれているこの作品を当時（明治末期）の東京語の実態を反映した資料として扱う。『三四郎』の舞台は東京帝国大学とその周辺である。主人公の小川三四郎は九州から上京した<sup>(2)</sup>数え年23歳の真面目な青年で、本郷区駒込追分町に下宿する。入学後その友人になる佐々木与次郎は三四郎とは異なり軽薄な言動をとる特徴的なキャラクターの人物で、本郷区駒込東片町にある広田先生の家<sup>(3)</sup>に寄宿している（後に駒込西片町に引っ越す）。広田先生は広田蓑といい、第一高等学校の英語教師で家族はいない。三四郎が恋をする女性・里見美禰子は教養ある都会的な女性で本郷区真砂町に住んでいる。その友人の野々宮よし子は野々宮宗八の妹。宗八は帝大（理科大学）の研究者で都下（現新宿区）の大久保に住み始めた。広田先生や宗八とも親交がある原口という画家は本郷区駒込曙町に居を構える。以上のどの人物も教養のある者として描かれているが、特に若い男女を中心に物語が展開される一種の青春小説であることから、当時の教養ある若者の言葉づかいをよく知ることができる作品と言える（ここで名の挙げた主要登場人物名については、以後「三四郎・与次郎・美禰子・よし子・宗八・広田先生・原口」と統一的に表示する）。

調査方法としては、係助詞「は」に関わる非融合形・融合形の用例を収集し、その融合率を算出して分析することを基本とするが、実際に分析を行う対象は、以下の「(ア)～(オ)のそれぞれと係助詞「は」との融合」である<sup>(3)</sup>。

- (ア) 助詞「て・で・と・に・の」
- (イ) 形容動詞連用形「～で」/断定の助動詞「だ」の連用形「で」
- (ウ) 指示代名詞「これ・それ・あれ」
- (エ) 名詞「こと・もの」
- (オ) 動詞（補助動詞を含）連用形

例えば（ア）の場合であれば、テワ・デワ・トワ・ニワ・ノワという各非融合形とそれぞれに対応する融合形<sup>(4)</sup>チャ・ジャ・タ・ニャ・ナとを分析対象として取り上げるわけである。

### 3. 調査の結果と分析

使用テキスト（前述のように近代作家用語研究会(1984)の「」内を会話文とし、そこに現れる用例を収集することを基本とした。ただし「」で表示されていても実際に発言していない場合は心話文、「」外でも会話文や心話文と判断できるものは地の文であることをそれぞれ明記した上で、用例数に合算してある。融合率は小数点以下を四捨五入して算出した。まず、主要登場人物ごとに、係助詞「は」に関わる全体的な融合率をまとめてみると【表1】のとおりである。

【表1】『三四郎』における係助詞「は」全体の主要登場人物別融合率

人物名	非融合形	融合形	融合率
三四郎	38 (地4 含)	40 (心話1・地3 含)	51%
与次郎	47 (地3 含)	83 (地4 含)	64%
美禰子	13 (地3・引用2 含)	25 (地1 含)	66%
よし子	4	7	64%
宗八	12 (地1 含)	12	50%
広田先生	49	41 (地2・引用1 含)	46%
原口	17	22	56%

融合率を比較すると高い順に、女性2人と与次郎(64~66%)>原口(56%)>それ以外の男性(46~51%)となる。三四郎と与次郎は同世代の若い男性でありながら13%も差があることが分かる。

次に、融合のパターンを係助詞「は」に前接する音節の五十音順に整理してみると、①「ては」・②「では」・③「とは」・④「には」・⑤「のは」・⑥「りは」・⑦「れは」の7種に分類される。以下、各パターンごとに順次、主要登場人物別融合率を中心にみていくことにしよう。

①「ては」

【表2】『三四郎』における「ては」の主要登場人物別融合率

人物名	非融合形テワ	融合形チャ	融合率
三四郎	2 (地1 含)	2	50%
与次郎	1	22 (地1 含)	96%
美禰子	0	2	100%
よし子	0	1	100%
宗八	0	1	100%
広田先生	5	8 (地1 含)	62%
原口	0	7	100%

よし子・宗八のように用例数全体が極端に少ない人物は、融合形が1例のみでも融合率が100%となってしまうが、いずれにしても、すべての人物に融合が見られ、性別や年齢に関係なく融合している。融合率の特に低い者も見られない。このことから、①「ては」には江戸訛という意識が弱いことが読み取れる。人物別に見ると、与次郎の融合形チャの用例数が突出して多くなっている(22例)。これは、与次郎の特徴的な性格(真面目な三四郎に対し与次郎は軽薄な言動をとり口も達者な人物として描かれる)によるものだと思う。今、この融合形には江戸訛という意識が弱いことを指摘したが、これを裏から言えば、むしろ会話文において非融合形を使う時に特別な意識が働くものと考えられる。三四郎と与次郎の非融合形(計3例)を具体的に確認してみると、次のようであった。

＃4 すると無暗に女に近付いてはならないと云う訳になる。(話手=三四郎(地の文)。文番号261)

# 5 「学問の府はこうでなくってはならない。(略)」(話手=三四郎。文番号900)

# 6 「だから、薬を飲んで、待ってては不可<sup>いけ</sup>ない」(話手=与次郎。文番号7341)

# 4 は「 」が付いていない地の文における非融合例、つまり三四郎の心話文中での言葉である。汽車で乗り合わせた女に「あなたは余っ程度胸のない方ですね」と言われ狼狽し、思考を巡らせた後にこのような結論にたどり着いた場面である。# 5 は三四郎が入学直後に決意を新たにすする箇所で、「——三四郎は大学者になった様な心持がした」という文が続く。三四郎の非融合例はいずれも聞き手がその場におらず、自らのこうすべしという考えを言葉にした場面であって、普段与次郎たちと交わすような一般の会話には見られぬ意識が働いていると言えるだろう。# 6 は与次郎が悪だくみを提案し三四郎を誘導する場面で、わざと丁寧な言い方をしているところである。広田先生は非融合形テワを最も多く使用する(5例)が、【表1】から分かるように、全体としても最も融合率が低く丁寧な口調が際立つ人物である。作中における位置づけとしても、年長者として三四郎を導いていくような場面が多く、そのような先生の性格ゆえに非融合形が多くなっているものと考えられる。

## ②「では」

【表3】『三四郎』における「では」の主要登場人物別融合率

人物名	非融合形テワ	融合形ジャ	融合率
三四郎	2	36 (心話1・地2含)	95%
与次郎	4	44 (地3含)	92%
美禰子	0	22 (地1含)	100%
よし子	1	5	83%
宗八	1	9	90%
広田先生	5	24 (地1含)	83%
原口	3	14	82%

すべての人物に融合が起き、融合率も高い。特に美禰子は融合形しか使用せず、【表1】で最も全体的な融合率が低かった広田先生でさえ、ここでは人並みの高率となっている。主要登場人物以外にも、名前が明記されていない黒い男・博士・小説家・広田宅の女も融合しており、性別・年齢や職業・階層等に関係なく広く融合している。発話者にかかわらず会話文においては融合する方が自然で、②「では」には江戸訛という意識が非常に弱いことがうかがえる。①「では」と同様、非融合形を使用するときにもむしろ特別な意識が働いていると言える。以下に非融合形の例をいくつか挙げる。

# 7 「そう云う精神でやっているのか。では君は原稿料なんか、どうでも構わんのだったな。」(話手=三四郎。文番号3446)

# 8 細工が悪いのではない。悪い細工が悪いのだ」(話手=与次郎。文番号3701)

# 9 「では行くかな。とうとう引張出された」(話手=広田先生。文番号2926)

# 7・# 8の三四郎と与次郎に関しては、わざと丁寧な言い方をしている場面であり、

それに伴って非融合形が出現している。# 9 の広田先生は、①「ては」の条でも述べたように堅い口調の人物で日常的に非融合形を使うこともあるようだ。

③「とは」

【表4】『三四郎』における「とは」の主要登場人物別融合率

人物名	非融合形トワ	融合形タ	融合率
三四郎	8 (地1含)	0	0%
与次郎	5	2	29%
美禰子	0	0	—
よし子	2	0	0%
宗八	2	0	0%
広田先生	8	0	0%
原口	0	0	—

融合形の出現頻度がきわめて低く、ほとんどの人物は融合形を使用しない。例外的に与次郎のみ融合形を2例使用しているが、その融合例はある脚本中に出てくる“Pity’s akin to love.”という英語の成句の邦訳を、与次郎が、句の趣が俗謡だから訳も俗謡でなくてはならないとわざわざ断った上で以下のように提案する場面で現れる。

#10 「少し無理ですがね、こう云うなんでしょう。可哀想だた惚れたって事よ」  
(文番号2594)

#11 「なにつまらない——可哀想だた惚れたって事よと云うんです」(文番号2613)  
その後、この訳について与次郎自身が次のように説明する。

#12 「いや、少し言葉をつめ過ぎたから——当り前に延ばすと、こうです。可哀想だた惚れたと云う事よ」(文番号2620-2621)

このことから、与次郎には、非融合形トワをタと融合させることは俗っぽい言い回しであり、言葉をつめ過ぎた言い方だという意識、すなわち融合形タに対する強い卑俗感・ぞんざい感があることが知られる。このような強い訛意識がひとり与次郎だけのものではなかったことは、この「可哀想だた惚れたって事よ」という訳に対して、広田先生が下劣の極みという評価を下し、苦い顔となることから明らかである。少なくとも『三四郎』の主要登場人物のような明治の教養のある者たちにとって、③「とは」の融合形は積極的に避けるべきものと捉えられていたことが分かる。

④「には」

【表5】『三四郎』における「には」の主要登場人物別融合率

人物名	非融合形ニワ	融合形ニヤ	融合率
三四郎	6	0	0%
与次郎	10	2	17%
美禰子	4 (引用2含)	0	0%
よし子	0	0	—

宗八	3	1	25%
広田先生	9	0	0%
原口	9	0	0%

融合形を使用していたのは与次郎と宗八（それぞれ2例・1例）のみであった。融合率の低さから見ても、訛意識が強く一般には使いにくい融合形だったことが知られる。与次郎は、③「とは」では融合形を使う唯一の存在であり、①「ては」においては突出した融合形使用数の多さを誇る人物であった。ここでの融合形ニャの使用もその独特の性格によるものと考えてよいだろう。宗八の方には人物造形上その種の特異性はなく、融合形の使用は一見不審にも思われるが、その使用箇所を確認すると、③「とは」で取り上げた、与次郎の翻訳を聞いている特にくだけた場面のものである。与次郎のペースにまんまと乗せられた結果の思わずの融合だと解される。

⑤ 「のは」

【表6】『三四郎』における「のは」の主要登場人物別融合率

人物名	非融合形ノワ	融合形ナ	融合率
三四郎	11	0	0%
与次郎	16 (地1含)	1	6%
美禰子	4	0	0%
よし子	1	0	0%
宗八	3 (地1含)	0	0%
広田先生	15	0	0%
原口	4	0	0%

与次郎のみ融合例が1例あった。③「とは」で触れた、翻訳について仲間内で話している非常にくだけた場面でのものである。ただし与次郎には非融合形が16例見られることから、与次郎も普段は非融合形を使用していることが分かる。よって、⑤「のは」は通常融合しないが、いちじるしく気安さを伴う場面で、かつ与次郎のような性格の人物だと例外的に融合することもあるわけである。

⑥ 「りは」

【表7】『三四郎』における「りは」の主要登場人物別融合率

人物名	非融合形リワ	融合形リャ	融合率
三四郎	0	0	—
与次郎	1	3	75%
美禰子	0	1	100%
よし子	0	1	100%
宗八	0	0	—
広田先生	0	5	100%

原口	0	1	100%
----	---	---	------

融合形のすべてが「ありゃしない」のように「動詞連用形+は～ない」の表現パターンでの融合であった（与次郎に1例だけ見られる非融合形は「より（格助詞）+は」のパターン）。『三四郎』において動詞連用形と係助詞「は」が接するとき必ず否定表現を伴っていることから、否定の表現を含めた「動詞連用形+は～ない」という表現パターンが固定的に使用されるに際し、多音節のこの固定的表現パターンの発音をより簡便化させる「ありゃしない」のような融合形が多用されるようになった結果、むしろ融合形がデフォルトとの感覚を生じ、訛意識も低くなったものと想像される<sup>(5)</sup>。ちなみに、後述の⑦「れは」に分類される「あれ（指示代名詞）+は」の融合の場合も融合形はアリヤという、「あり（五段動詞連用形）+は」の融合と同じ形となることが期待されるが、実際には、両者の融合のしやすさに顕著な相違が見られる。すなわち与次郎と広田先生は「あり+は」をすべてアリヤと融合するが、「あれ+は」の方は全く融合せずアレワのままである（非融合形アレワは与次郎1例・広田先生3例）。このことは、⑥の「あり+は」の場合、否定の表現を含めた「ありゃしない」という融合形表現パターンが多用・固定化され、それとして一つのまとまった定型表現と認識されることによって訛意識の低下を来したことを物語る、一つの傍証と言えるだろう。

⑦「れは」

【表8】『三四郎』における「れは」の主要登場人物別融合率

人物名	非融合形レワ	融合形リヤ	融合率
三四郎	9（地2含）	2（地1含）	18%
与次郎	10（地2含）	9	47%
美禰子	5（地3含）	0	0%
よし子	0	0	—
宗八	3	1	25%
広田先生	7	4（引用1含）	36%
原口	1	0	0%

融合率は全体としてあまり高くなく（原口は用例数自体が少ないため一応別とすれば）特に女性の美禰子が全く融合形を使用していないことが注目される。融合形リヤには卑俗感・訛意識を伴うさまがうかがえる。ここでも与次郎の融合形使用の多さ（9例）が顕著である。これも今までと同様、やはり与次郎の特徴的な性格による結果と言えるだろう。なお、三四郎の融合例2例は地の文（心話文）と「そりゃ……」と言い淀むところに出てくる。宗八の融合例1例は③「とは」で見た、例の翻訳について話している箇所であり、くだけた場面における咄嗟の発話でのものである。

これまで、『三四郎』における係助詞「は」融合の実態を「は」に前接する音節ごとに分類・分析してきたが、ここで【表1】に戻ってみると、すでに指摘したように（独特の

キャラクターを備える与次郎は別として)美禰子・よし子の女性2人の融合率が最も高いグループにあることがあらためて目を引く(特に美禰子は主要登場人物中最高の融合率である)。一般論としては教養あるこの2人の女性にはむしろ融合率の低いことが期待されるところだが、融合形の内訳(融合パターン)に着目すると、この2人の融合例のほとんどが訛意識のきわめて弱いと考えられる②「では」の融合形ジャによって占められていることを知る。そこで【表1】から②「では」を除外した各主要登場人物ごとの融合率を算出し直してみたところ【表9】のようになった。

【表9】『三四郎』における②「では」を除外した主要登場人物別融合率

人物名	デワ以外の非融合形	ジャ以外の融合形	融合率
三四郎	36 (地4含)	4 (心話1・地3含)	10%
与次郎	43 (地3含)	39 (地4含)	48%
美禰子	13 (地3・引用2含)	3 (地1含)	19%
よし子	3	2	40%
宗八	11 (地1含)	3	21%
広田先生	44	17 (地2・引用1含)	28%
原口	14	8	36%

②「では」を除外すると、よし子是用例の総数自体が少なくなるため、融合率40%とやや高くなってしまいが、美禰子の融合率は19%とぐっと低くなる。反面、与次郎の融合率の高さが48%と突出して目立つようになる。やはり与次郎は他の人物と比べ、特に融合形を多用する特徴的な人物であることが知れる<sup>(6)</sup>。

#### 4. 融合形の消長と訛意識

如上の検討の結果を踏まえ、さらに、明治東京語から現代共通語へかけての融合形の消長と訛意識との関連について考えみたい。まず参考として、現代語本位の現行の小型国語辞典の見出し語に、融合パターン①～⑦の各融合形が掲出されているかどうか検索してみた。具体的には『岩波国語辞典 第7版新版』(2011)と『三省堂国語辞典 第7版』(2014)を検索したところ、見出し語として立項されていたのは両書ともに①「ては」と②「では」の融合形、すなわちチャとジャの2形であった。このことに内省を加味しても、チャ・ジャは現代共通語においてほとんど訛りという意識なく日常普通に使用されていると言ってよいだろう。では、係助詞「は」諸融合形の中でチャ・ジャだけが現代共通語にまで生き続け得た理由は何なのだろうか。その手がかりを探るために、あらためて『三四郎』のデータに立ち帰り、各融合パターンごとに(主要登場人物以外をも含めた)全登場人物の用例を合わせて融合率を算出してみたのが【表10】である。

【表10】『三四郎』における融合パターン別融合率（全登場人物）

融合パターン	非融合形	融合形	合計	融合率
①「ては」	8	44	52	85%
②「では」	16	159	175	91%
③「とは」	25	2	27	7%
④「には」	41	3	44	7%
⑤「のは」	54	1	55	2%
⑥「りは」	1	11	12	97%
⑦「れは」	35	17	53	33%

融合率を見ると、①「ては」・②「では」・⑥「りは」が特に高く（85～97%）、③「とは」・④「には」・⑤「のは」が特に低く（2～7%）なっている。⑦「れは」はそれらの間にあるがやや低めの値（33%）を示している。融合率が特に高いということは、融合形を使うのがむしろ常態であるということだから、全体的な訛意識のはなはだしい弱さを意味する。その意味で、融合率の際だった高さは以後もその融合形が使い続けられるための一つの重要な指標となるだろう。実際、現代共通語にまで日常的に残存するチャ・ジャの属する融合パターン①・②の融合率はきわめて高い<sup>(7)</sup>。だが、同じく融合率の高さが顕著な⑥「りは」の融合形リャについては、少なくとも現代共通語において一般的な存在ではない。とすれば、現代共通語への残存の条件として、融合率の高さ以外の要因をもさらに追究する必要があるということになる。とりあえず今考えられる要因としては、融合率の高さをも含めて以下の諸点となる。

- I) 融合率の高さ：融合率が際だって高い融合パターンは、融合を抑えようとする訛意識が非常に弱く融合形を使うのがむしろデフォルトであることを意味する。
- II) 出現頻度の高さ：出現頻度が高く多用される融合パターンであれば、発音がより簡便化される融合形を常用する実際のメリットは非常に大きく、簡便化を強く志向する力が融合を抑えようとする訛意識に打ち勝つ可能性が考えられる。
- III) 表現パターンの固定化：係助詞「は」を含むある特定の言いまわし（表現パターン）が慣用され固定化すれば、その固定的表現パターンは必然的に多音節であるため、発音がより簡便化される融合形を常用する実際のメリットは非常に大きく、簡便化を強く志向する力が融合を抑えようとする訛意識に打ち勝つ可能性が考えられる。しかもこの場合、融合形が固定的表現パターンの中に取り込まれていくや、表現が固定的であるだけに、融合形を含めてそれとしてひとまとまりの言い方であるという意識が増大していくため、本来それが融合であるという分析意識が薄れる結果、訛意識の弱体化にさらに拍車がかかっていくことになるものと想像される。

ここで、この要因Ⅲ「表現パターンの固定化」について具体的な説明を加えておこう。『三四郎』における融合形チャ・ジャの使われ方を細かく観察してみると、「～ちゃいけな」「～ちゃならない」「～じゃない」「～じゃありませんか」のような形をとっているこ

とが多いことに気づく。この「ちゃ否定」「じゃ否定」の表現パターンが多用され慣用化すれば、語と語が融合したものであるという分析意識は当然弱まるだろう。実際の用例数を見てみると、『三四郎』において①「ては」の融合形チャは全部で44例あったが、そのうち「ちゃ～ない」は22例（「ちゃ～ません」5例含）で半数をしめる。その他「～しなくちゃ。」のように、それ以降の表現が省略されている場合も4例あり、これも実質「ちゃ～ない」として数えることができる。それ以外は「ちゃ駄目だ」「ちゃ困る」「ちゃ大変だ」「ちゃどうです」などのような形をとっているが、「ちゃ駄目だ」「ちゃ困る」「ちゃ大変だ」などは否定的ニュアンスを帯びている点で「ちゃ否定」のパターンに準じて考えることができる。このような準ずるものも含めて「ちゃ否定」のパターンは都合40例に上り、これは実にチャ全体の91%に達する。『三四郎』における融合形チャの大半が「ちゃ否定」の表現パターンで覆われているのである。一方、②「では」の融合形ジャの方は全部で159例あり、そのうち「じゃない（か）」は88例、「じゃありません（か）」は21例を数える。ほかにも「じゃありゃしない」「じゃなかるうか」「じゃあるまい」「じゃなかったんだ」のようにいくつかバラエティがあるが、全159例中131例（82%）がここに挙げた否定表現を伴うパターンとなっている。ジャで否定表現を伴わないのは、「じゃ、もう帰りましょう」（話手=美禰子。文番号3310）のように文頭で接続詞ないし感動詞の役割を担って用いられる場合で28例見られたが、この種のを別にすれば、残るジャの全例が「じゃ否定」のパターンでの使用ということになる。⑥「りは」における表現パターン固定化の様相については、すでに個別的分析の条で述べたのでここでは繰り返さない。

また、近世断本を通時的に調査した前田(2002)によれば、明和・安永期（1764～81）には係助詞「は」の前接末尾母音が*/i//e/*の語は融合を起しやすく、化政期（1804～30）になって*/u//o/*の語の融合も起きるようになったという。この観点を『三四郎』に適用すると、前接語末尾母音*/i//e/*は融合パターン①・②・④・⑥・⑦、前接語末尾母音*/o/*は同じく③・⑤となる（*/u/*に該当するパターンはなし）。【表10】に再び戻ると、『三四郎』において融合率が特に高い①・②・⑥と中間的な⑦のすべてが前接語末尾母音*/i//e/*に属し、前接語末尾母音*/o/*に属する③・⑤はすべて融合率が特に低いという、かなりきれいな対応関係が見られる（うまく対応しないのは④のみ）。とすれば概略、係助詞「は」の融合現象において、化政期から新たに融合するようになったものより、それ以前から長く使われて続けてきた融合形の方が明治東京語にもよく出現するという大きな傾向がありそうである。その詳細については今後なお検討する必要があるが、この音韻的観点からの要因を今回さらに、

Ⅳ) 前接語末尾母音*/i//e/*：係助詞「は」の前接語末尾母音が*/o/*ではなく*/i//e/*であること。

として付け加えておきたいと思う。上記Ⅰ～Ⅳの各要因について、融合パターンごとの状況が把握しやすいよう記号化してまとめたのが【表11】である（◎○△×の表示は各要因内での相対的な差異を示したものである）。

【表11】『三四郎』における各融合パターンと融合要因との関係

融合パターン	融合率	出現頻度	定型表現化	前接語末母音/i//e/	現代共通語での融合形残存
①「ては」	◎	○	○	○	○
②「では」	◎	◎	○	○	○
③「とは」	×	×	×	×	×
④「には」	×	○	×	○	×
⑤「のは」	×	○	×	×	×
⑥「りは」	◎	×	○	○	×
⑦「れは」	△	○	×	○	×

【表11】から、『三四郎』における係助詞「は」の各融合パターンのうち上記4要因すべての条件を満たす、すなわち4項目すべてに丸印が付されている①・②においてのみ、その融合形が現代共通語にまで残存していることが明らかである（結果的に要因Ⅳ「前接語末母音/i//e/」は必ずしも不可欠の条件とは言えず、要因Ⅰ～Ⅲの3点をすべて満たしていれば現代共通語残存の条件をクリアできることになる）。

結局、明治（末期）東京語における係助詞「は」各融合パターンのうち、融合率の際だった高さ、出現頻度の（ある程度以上の）高さ、融合部分と後続部分とが緊密に連結した確固たる表現型の確立・慣用、の3条件がすべて満たされるとき、これら3条件が相俟ち、その融合形にぞんざいであるという卑俗感や、語と語が融合したものだという分析意識が弱くなって訛意識もはなはだしく稀薄化する結果、現代共通語にまで残存するに至ったものと考えられるのである。

### 5. おわりに

本稿の検討の結果、『三四郎』を資料とした明治末期東京語における係助詞「は」の融合について、次の諸点が明らかとなった。

1. 発話者の年齢・ジェンダーあるいは階層・教養という要因によって融合しやすい／しにくいとは一概に言えず、融合パターンのいかんによってその様相は大きく異なる。
2. 総じて融合しにくい傾向を示すパターンにおいても、軽薄な言動をとるような特徴的なキャラクターの人物であれば、教養ある若い男性にも融合が起こる。
3. 諸融合形のうちチャ・ジャの2形のみが衰退することなく現代共通語にまで普通に残存している。それは、(i)融合率の際だった高さ、(ii)出現頻度の高さ、(iii)「ちゃ否定」「じゃ否定」という形で固定表現化され融合であるという分析意識が薄れること、等の理由が相俟ってその訛意識の極度の稀薄化を招来した<sup>(8)</sup>ことにより、明治東京語以降も抵抗感なく日常的に使用され続けたからである。
4. 音韻面から見ると概略、係助詞「は」の前接語末尾母音が/i//e/のとき、/o/の場合より融合形が出現しやすいという大きな傾向があるようである。

今回は『三四郎』を中心とした考察であったが、それでもささやかながらも先行研究で

は言及されなかった新たな知見を付け加えることができた。今後機会あらば他の資料を加えて、共時的にも通時的にも係助詞「は」の融合現象についてさらに考究していきたいと思っている。

【注】

- (1) 係助詞「は」の融合現象に関する先行研究において明治東京語を直接取り上げたものとしては、以下に挙げる小松寿雄のものだけと言ってよい状況である。すなわち、小松(2002a)は人情本や明治期の小説などを資料として、近世後期から明治にかけての女性の係助詞「は」の融合について調査を行い、小松(2013)では夏目漱石『吾輩は猫である』(明治38-39発表)における「は」の融合に関して、その種類別や話者別に整理を試み、考察を加えている。
- (2) 三四郎は作中、九州方言ではなく他の登場人物と同様、東京語を話す。
- (3) 例えば小松(2002a)は、当該人物の使用する係助詞「は」の全数をもとに融合率を算出したが、自身で「先行語の末音によっては、融合しないこともあって、けっして最上の基準ではない」(前掲21頁)と注記している。この基準に従うと例えば、「野々宮さんは居らんぜ」(話手=三四郎。文番号1169)における係助詞「は」も非融合形として計算に含める扱いとなるが、本稿では実際に融合を起こす前接語を基準に用例を収集・分析する方針で臨んだ。
- (4) 係助詞「は」の融合形にはニャ・チャのような短呼形とニャー・チャーのような長呼形とがあり得るが、『三四郎』においては融合形のほとんどが短呼形で、長呼形はわずかにチャーが3例(文番号2547・4230・4327)見えるのみであった。その数のきわめて少ないこと、および用法上特に短呼形との差異が見出されないことにより、本稿では煩雑さを避けるため、この長呼形チャー3例も含めて「チャ」で表示することにする。
- (5) なお、「連用形+は〜ない」という表現パターンをとるのは動詞連用形だけではない。『三四郎』には形容詞連用形「〜く」と係助詞「は」が接した例も見られたが、動詞連用形のみが融合を起こしていた。その要因については今後の検討課題としたいが、動詞連用形の末尾母音は/i//e/であるのに対し形容詞のそれは/u/という、音韻的な相違が関係している可能性が考えられる。というのは、融合パターン①〜⑦を見渡してみればわかるように、『三四郎』で係助詞「は」の融合が起こるのは、その前接語末母音が/i//e//o/の3者に限られ(形容詞連用形に限らず)/u/の場合には融合が起きていないからである。
- (6) 与次郎は生真面目な主人公・三四郎と対照的な軽薄な人物として描かれているが、本稿とは別に二葉亭四迷『浮雲』(明治19-23年発表)を調査してみたところ(使用テキストは十川(2004))、主要登場人物の一人・昇(やはり生真面目な主人公・文三と対照的に描かれる軽薄な同僚)も、与次郎と同様の融合傾向を示していることが分かった。具体的には、昇の融合形使用の内訳(融合パターン)を見ると、明治期の教養ある若い男性でありながら、一般に融合しにくく訛意識が高いと考えられ

る③「とは」・⑤「のは」の融合形をも使用していた。小松(2002a)は江戸～明治東京の女性について、係助詞「は」の融合形使用者の階層性は同じく江戸訛の一つである連母音アイの融合よりも弱く、融合するかどうかは比較的発話時の場面や人物の性格によるところが大きいのではないかと指摘しているが、このことは、与次郎・昇という明治期の男性にも当てはまる。

- (7) 『浮雲』の調査結果でもその融合率は①「ては」78%・②「では」94%と、やはり非常に高い値を示している。ちなみに、明治東京語におけるチャ・ジャに対する同時代人の観察・意識を、近代日本における最初期の口語文典として知られる松下大三郎『日本俗語文典』(明治34年刊)——その総論によれば「主として東京の中流に行はるゝ語法」(松下/徳田(1997) 2頁)を対象としたものという——を手がかりに探してみると、普段の生活の中で「私ハ、ソウハ思ヒハ、シマセヌヨ、ダトテ、其ハ、余リヒドイデハ有リマセヌカ。」とは言わずに「私<sup>ワシ</sup>シャソウハ<sup>ソウ</sup>思<sup>オモ</sup>ヤシマセ<sup>シマ</sup>センヨ、ダツテ<sup>ツ</sup>其<sup>ソノ</sup>リヤ、余<sup>オノ</sup>リヒドイ<sup>ヒドイ</sup>チャ有<sup>ア</sup>リマ<sup>マ</sup>センカ。」のように言うのは自然でこれを卑語と切り捨てるのは間違っていると論じたり(前掲「第三版の辞」2頁)、チャに関して「ハはイ列及エ列の音にそふときはその行の拗音の長音となる。たとへば雨ガ降ッテハ困ル、風ガ無クテハ暑イの降ッテハ、無クテハを降ッチャア、無クチャアといふ」(前掲210頁)と記述したりしており、松下の観察・認識においてもチャ(一)・ジャに卑俗感・訛意識のようなものはやはり認められない。
- (8) 本稿では明治東京語を対象とするため、明治東京語における訛意識を中心に考察してきたが、中沢(2016)によれば、『浮世風呂』において「ては・では」には突出して融合形が現れやすいといい、すでに化政期江戸語の時点でチャ・ジャに対する訛意識が(ある程度)弱かったことが知られる。なお、園田(1996a)(1996b)によれば、近世の上方でも「では」の融合は起きるといい、上方でも融合が起きれば当然その融合形ジャに江戸訛という意識が薄れる一因となる。上方では「ては」は融合しないため融合形チャは現れないが、チャは形態上ジャの清音形にあたるためジャに類推し(ジャほどではないにしても)ジャに準じてチャの江戸訛意識の弱化に与った可能性が考えられる。

### 【主要参考文献】

- 近代作家用語研究会・教育技術研究所編(1984)『作家用語索引 夏目漱石4 三四郎』教育社
- 見坊豪紀ほか編(2014)『三省堂国語辞典 第7版』三省堂
- 小松寿雄(1985)『江戸時代の国語 江戸語—その形成と階層—』東京堂出版
- (2002a)「江戸東京語における女性の係助詞ハと連母音アイの融合」『国語と国文学』79-8
- (2002b)「明和～天保期江戸語における男性の係助詞ハの融合」『近代語研究 11』武蔵野書院
- (2006)「会話篇に見る幕末の江戸語—音節融合を中心に—」『近代語研究13』武

蔵野書院

- (2013) 『『吾輩は猫である』における係助詞「は」の融合転化』『近代語研究17』武蔵野書院
- (2015) 「明和の洒落本における係助詞ハの変容—付・浮世風呂・浮世床との比較—」『近代語研究18』武蔵野書院
- 斎藤秀一編/斎藤義七郎解説 (1976) 『東京方言集』国書刊行会
- 園田博文 (1996a) 「後期上方語における助詞融合をめぐって—「デ」と係助詞「は」との連接を中心に—」『国語学研究』35
- (1996b) 「音訛より見た上方語の江戸語描写について—江戸人の上方語描写との対比を通して—」『文藝研究』142
- (1996c) 「後期上方語の助詞融合—一人称代名詞と係助詞「は」との連接をめぐって—」『東北大学文学部日本語学科論集』6
- 中沢紀子 (2016) 「『浮世風呂』における助詞融合現象」『帝京大学文学部紀要』47
- 西尾 実ほか編 (2011) 『岩波国語辞典 第7版新版』岩波書店
- 二葉亭四迷/十川信介校注 (2004) 『浮雲』岩波書店
- 前田桂子 (2002) 「噺本における助詞「は」の融合現象」『日本近代語研究3』ひつじ書房
- 松下大三郎/徳田政信編集解説 (1997) 『新訂 日本俗語文典 付 遠江文典』勉誠社
- 松村 明 (1998) 『増補 江戸語東京語の研究』東京堂出版

(かみさか あやな・千葉大学文学部日本文化学科2019年卒業)